

心理革命。 エゴの奴隷からの解放

これまで、宇宙と人間の進化について、通信を重ねて来ましたが、8号はいかがでしたか。進化にとって欠くことのできない性の真実、神秘は、どのように皆さんの心の扉をたたくことができたでしょうか。今回の9号は、性とともに決して欠くことのできない心理的な仕事についてです。それは、我々の魂から、魂の衣である壺をはぎとり、永遠の暗闇に押し込めようとしているエゴ（我欲）、そのエゴを知らずにできることではないのです。9は三位一体を3度成しとげた完全なる人を表わします。我々が完全な人に、少しでも成っていくためには、性と心理の2つの仕事をせすに実現していくことはできません。我々が理解しなければならぬエゴと心理について、深めたいと思います。

1. 我々に与えられているもの

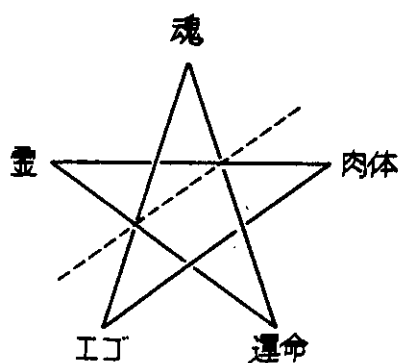
外と内を区別する

我々は今ここにおいて、1人1人、自分の心や体の状態を持っています。だれでも変わることはない平和と幸福を願っているながら、常に不安定に揺れ動いています。なぜなのでしょう。社会をより良く変えようとしている多くの理論、運動があります。政党や宗教団体、そのほか、大変多くの組織、グループが存在しています。それらの歴史や現実はどうでしょうか。平和のためと言いながら、それらはまるで、摩擦と争いの歴史のように思えます。個人と個人の間でも、個人と組織、組織と組織であれ、なにか1つ事が起きるたびに、それなりの反応と結果を生みます。どんなに小さな小石でも、池の中に投げ入れれば、その波紋が広がり伝わるように、なにかあるごとに傷つけたり、傷つけられたり、喜んだり、悲しんだり、怒ったり、得意になったり、自己嫌悪に落ち込んだり、無気力、怠惰、敵意、好意、情欲、嫉妬、憎悪……。あげきれないほどの感情や印象を抱き、それによって反応し、行動しています。それらは自分の周囲の状況、問題がそうさせるように見えますが、本当にそうでしょうか。それほど我々は確かな判断ができるのでしょうか。もし、できるとすれば、とっくの昔に人類はすべての問題、

すべての人間関係を解決し、平和を築き上げていたはずですが、でも現実には全く逆です。どんなに制度や国家の組織を変えても、自分が「良い」とするものだけしか認められない間は、なにも変わらないと思います。その人を、その理論や考えを、その宗教や政党を、そのグループを「良い」と思うのはどうしてでしょう。なにが「良い」という判断をさせるのでしょうか。家庭や学校、職場や社会に対しての不満はどこから来るのでしょうか。良いと思わせ、不満と思わせるのはあなたの心。私の心がそう思わせ、感じさせています。だれかがあなたに、そう思いなさいと命令していますか？そうではなく、自分自身がそうさせています。させていると思うことなど、全く意識できないほど、我々は無意識に生きています。ここで、A、B、Cの3人が初対面で出会ったとします。Aさんについて、Bさんは不快感を、Cさんは好意を持ったとします。1人のAさんは、不快な人物か、好意の持てる人物か、どちらが正しいのでしょうか。Aさんはそこにいます。そして不快に思っているのはBさん、Bさんの内面的な意識が不快と感じさせています。同様に、Cさんの心理的な内部で好意が生まれています。そうすると、AさんはAさんです。そしてAさんはただそこにいて、Bさん、Cさんの心の中に生まれた1つの印象、感情とは別のものです。このように、自分の外にあるもの、周囲で起こる物事と、それに対して自分自身が抱く反応（感情や印象など）とは別のことなのです。このことに気がつくことは、大変大事なことです。外と自分の内を区別しなければなりません。区別しようとする時、不快だと思った人物が、実は不快だと感じている自分の内面を見せてくれていることに気づくはずですが、このように、外にあるものは、必ず内を反映しています。ですから、今まで、外にあるものは内にあると書いてきました。すべての問題は内側にあって、いくら外を変えようとしても、本当はなにも変えることはできません。もし、真に自分を変えたい、家庭や社会を良くしたいと願うなら、1人1人が、まず自分の内側に目を向ける必要があります。自分を本当に知ろうとするところから、変化が始まります。

永遠なるものと死すべきもの

人間には魂、霊、肉体が与えられています。そしてエゴと運命も与えられて生まれてきます。このうち、永遠に存在するものは魂と霊です。魂は完全に神聖な、神の一部です。決して汚れることも罪を犯すこともなく、初めから光そのものです。ですから、この光をおおい隠している外側の壁をとり除きさえすれば、必ずと光輝く存在です。我々の感覚や理解など、はるかに越えた永遠に変わることはない輝く光です。日常の苦悩や苦痛から解放



され救われたいと思うような三次元とは、全く次元の違うところからやって来ます。肉体は有限な物質です。地球からもらった、目に見える物質です。形あるものは必ず滅びるもの、死すべきものです。霊は、魂と肉体の媒体、中和させる存在です。魂には形はなく、形をとるために霊という衣を着ます。霊は魂の乗り物であり、魂の体です。魂という100%神聖なものと、肉体という有限な不完全なものとの間に存在しています。そして、霊はその中に、中性な心理(サイキス)を持っていて、魂と肉体のバランスをとるために働いています。霊は精神的なくメンタルな、霊氣的なくエーテル的な)ものですから、肉体のある三次元ではなく、四次元のアストラル界に属しています。ですから、時間にも空間にも拘束されず、形もありません。そのために、我々の心理は、1日24時間、生きている間中、休みなく活動するわけです。夢の中では過去にも未来にも行け、望む場所、望むものになれる理由がここにあります。起きている間も、四六時中、外からの刺激や印象を受けとり、反応しています。前号で、鏡は霊の象徴であり、また霊を救わなければならないと書きましたが、それについて考えてみた方はありますか？我々の霊は、太陽である魂という神聖な部分と、月に属する不完全な人間的な部分の両方を持っています。最初に人間としての体を与えられる時は、この2つの部分を半分ずつ持って生まれて来ます。月は、太陽の光を反射します。ということは、太陽である魂のエネルギーでできている愛や意志や知性や善を、霊に伝え反映させるはずのものです。でも、現実はどうでしょう。魂の美しい愛や知性を映すどころか、我々の汚れた心理状態しか映らないのではないのでしょうか。その上、その汚れた心理の姿を見ることができないほど、曇りかかった目で、幻想を映し出して酔っています。我々の霊が、魂の天性を映し出せないのは心理の汚れ、エゴのせいです。その分厚い壁が魂の光をとじこめ、霊、心理、肉体が魂の天性のままに生きることをじゃましています。我々の霊は、魂の神聖な部分を持っているために、本来神聖なものです。そして、月に属する不完全な部分をも、完全に神聖なものにしなければならぬことを、我々の内的な意識は知っています。ですから、魂の声とエゴの声との間で、我々の霊、心理は摩擦を起こし、不調和に苦しんでいます。霊が我々の心理を映すように、鏡は我々の姿を映します。前に立つ我々の心理が汚れていれば、汚れた姿を映します。鏡に自分を映し、そこで自分の本当の姿を見なければなりません。もし我々の霊が、月の^{神聖な}部分^を太陽の^{神聖な}もの^{に変えて}いけるなら、その^{神聖な}部分が多くなつた分ずつ、神聖なものを映し出していくはずで、我々の魂は、我々がすべてを浄化し、神聖な永遠なるものへ進化するよう押しています。至高の一部である魂が霊、心理、肉体を1つに調和させ、エゴや運命を越え、我々のすべてが清められ進化していくように願っています。でも、現実はその反対です。エゴの低い欲望が霊に罪を犯させ、心理を汚し、魂をとじこめてしまっています。このままでは、自由になることはできません。すべては「私のエゴ」のせいです。エゴを根絶し、心理の汚れ

を洗い流し靈を救わなければなりません。ノーシスは、エゴと心理浄化について教えています。

運命とエゴ

運命とエゴは永続するものではありません。運命は、我々の転生の中で積み重ねて作ってきた歴史。一人一人の歴史によって決められていくものです。それは、我々がどこで、どのようにあろうとも、清められ進化していくために、最も必要な計画、修業のプログラムです。人生は修業と修得の場なのです。今までに重ねてきたカルマ(業)を払い、少しでも進化するための人生のプログラムであり、生まれる前に定められ、そのように我々は生まれて来ています。しかし、運命は絶対不変のものではありません。人間に与えられた自由をどう使い、どう生きるかによって、定められた運命を越えていけます。ここで大事な点は、一人一人の本当の歴史とは、起きた物事、成した事などの表面的な結果なのではありません。自分がなにを感じ思ったか、どう反応したか、その反応の仕方に対して、その後なにを考えどうしたか、そのような一人一人の内面の歴史なのです。ですから、外と内を区別することは、本当に大事な不可欠なことなのです。我々の内にあることは、おそかれ早かれ、必ず外に表われます。心理の内部にあるものは、必ず言動となって形をとるものです。ですから、外のできごとと内面の状態を、自分の意識を持って見つめなければなりません。外に表われたあやまちは、内面の誤まった心理状態がさせることです。外と内を区別しようと自覚するなら、外のできごとに対しての受け止め方や反応のしかた、外に対する自分の反応のしかたを変えようとする、はっきりした意識が出てくるはずで、この反応のしかたが変



わる時、その人は変わっています。そのように変わっていくためには、常に自分に目を向け観察すること、それによってエゴを発見し、心理を清めていくことが必要です。これは、ほかのだれにも頼めない自分自身の仕事です。

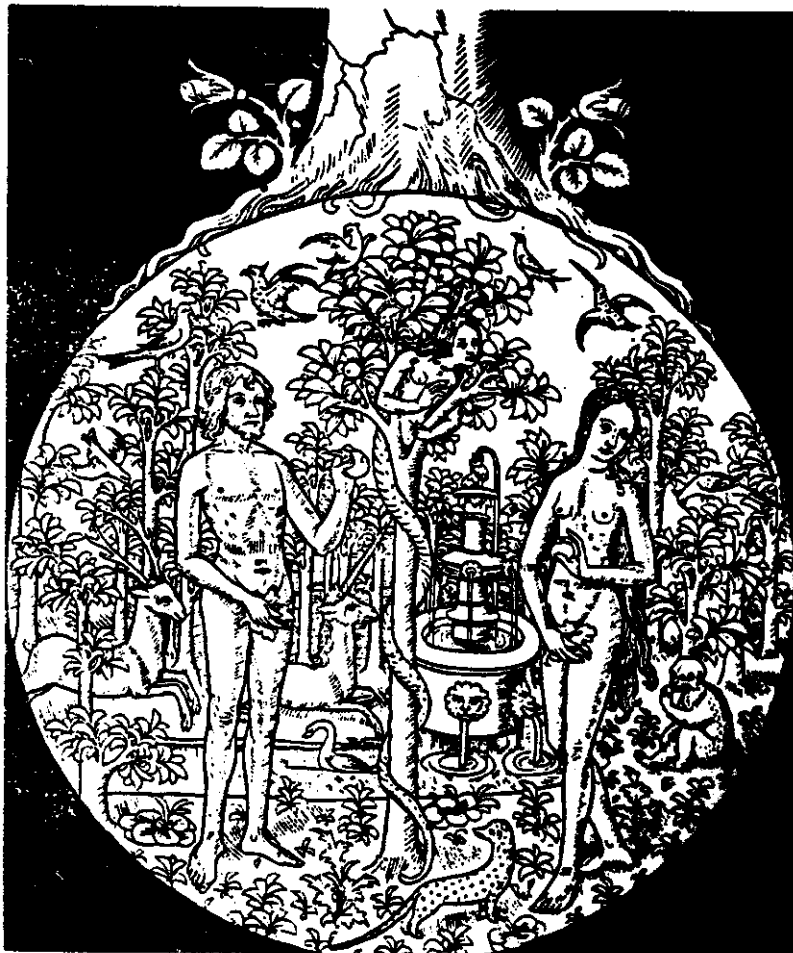
エゴ、これこそがすべての問題の根です。世界中で、だれでもそう思いながら、なすすべもなくいるというのが現状です。それは正しい知識がないからです。正しい知識——それがノーシスの教える性と心理、エゴについての知識です。これこそ、どんな宗教も教えなかった真実、叡智です。性と心理の真実を知らずして、進化の道を歩き始めることはできません。そして、我身で、この性と心理

の真実を生きることがない限り、だれ一人、進化の階段を登ることはできません。エゴは目には見えませんが、我々の内に住みつき、我々を盲目にし、ぬけがらのようにさせています。ちょうど寄生虫のように、我々から栄養分を盗みとり、我々が死ぬことなどおかまいなしに、自分だけ肥え太ることしか考えません。信じられないかもしれませんが、認めたくも、見たくもないかもしれません。でもエゴはだれの中にもいて、その人自身を奴隷のように苦しめています。自分の内に巣くっているエゴを理解しなければなりません。

2. 我々に寄生するエゴ

エゴは、我々が、初めて人間としての体を与えられる時、すべての人に等しく与えられるものです。ですから人間としてのスタートを切る時は、だれでも同じだったわけです。けれども転生を重ねる間に、一人一人、その人の歴史のあるがままに異なった状態を作ってきました。エゴは1つのエネルギーなので、四次元的に存在しています。ですから、夢の中でもエゴは活動します。魂が100%^{100%}千なのとは逆に、100%^{100%}一な、非常に重い強力なエネルギーです。エゴは、すべての人の中に確実に、無数に存在しています。エゴは、我々のマインド（想念、頭、心）の中にいて、パーソナリティ（人格）を通して外に表われます。よく“…らしさ”という言葉で個性を表現します。でも我々は無数のエゴにあやつられていて、純粋な天性で調和された個性など、全く持っていないのです。自分の意志と考えで行動し、確かな個性を持っていると信じ込み疑うこともありません。エゴの目隠しが、すべてを見えなくさせている、それがわからないほど目隠しされています。この目隠しは、自分の手で取り除くしかないので、パーソナリティ（人格）は、1回1回の人生の始まりと同時に作られ始め、肉体の死によって終わります。しかし、エゴは、その人自身が根絶しない限り、なくなることはありません。死後、次の肉体を与えられ新しい人生を送る時に、その人の所へもどります。これは磁気の法則によりますし、心理浄化とエゴ根絶をどこまでも完全に成しとげるためです。エゴは、我々の汚れた心理的な毒素であり、肉体の中に2つの成分として存在しています。それが乾燥水銀であり、砒素硫黄です。乾燥水銀は、我々が性エネルギーを消費することによってできます。砒素硫黄は、性エネルギーが肉欲、情欲のエゴのために使われてしまった時にできます。このように、すべてのエゴは我々の性エネルギーを盗みながら寄生し、強大になっていきます。人類の原罪、それが性の誘惑に負けて犯した罪、性の罪です。聖書にあるアダムとイヴも、蛇で象徴される性の罪を犯しました。すべてのエゴの根、そこに性の問題があります。だからこそ、性の真実と心理の仕事、エゴの根絶は切り離すことができないのです。エゴを肥え太らせ、我々を毒する性エネルギー、そして我々のエゴを根絶し、魂の黄金の霊体を創る性エネルギー、1つの性エネルギーが両極端に向かってしまいます。そこにある違いは、性の真実、神秘を我身で生き

るか、欲望のままにエゴの奴隷となって死ぬかです。我々は進化と退化の別れ道に、今、立たされています。どの道を進むかは、一人一人の自由です。だれも強制することはできません。でも、もし退化したくないのなら、本当に進化を願わなければなりません。心の底からきっぱりと、本当にひたむきに願わなければなりません。心からの願いと意志をもって求めるなら、必ず道が見えてきます。正しい知識のみが、進化への道を教えています。答は与えられます。



なぜ、エゴが与えられるか

我々は、内に神の一部である魂を持っています。聖なる父と母も、自分の内に存在しています。そして、宇宙のプログラムの中で、より進化するために、より高い存在となるために、この世の修業に旅立って来ました。エゴは、我々にあらゆる誘惑を与え罪を犯させ、地獄へ落とそうとしています。上に向かう我々に、下へ引きずり降ろすものが与えられている。これは不必要な、矛盾のように思うかもしれませんが、でも、以前に書いたように、そうではありません。2つの力が存在しなければ、どんな動きも生じません。動きがなければ、下に落ちる危険はなくとも、決して上にも行けません。人間は、真に必要と思う時、自らの行動を始めます。だれの命令も強制もない、そしてだれの目もないところから、自らの意識ある行動を実行します。もし、完全な幸福の中にいたら、我々は決して動くことはないでしょう。良いものだけを与えられて、そこからは、なんの考えも行動も生まれず、進化を願う必要もありません。でも、この宇宙の中で、動きのないものはありません。そして、すべてはどこにありと、進化に向かって動いて

います。エゴは、我々にあらゆる機会を使って誘惑を与え、我々を闘いへとかり立てています。落ちてはいけない、買にはまってはいけない、眠ってはいけない、現実を見なさい、前を向きなさい、と我々の心の扉を叩いています。進化をしたのなら、エゴに勝たなければなりません。イエスがすべての肉欲と感情に勝ってみせたように、釈迦がすべての欲望を捨てたように、自分との内的な闘い、これが人生です。大事なことは、あらゆることを進化のために生かすことです。エゴは、だれにもあります。病気も失敗も孤独も絶望もあります。でも、すべての人が自覚しなくとも、学ぶためにここにいます。病気や失敗、孤独、それが重大なのではありません。それらのことをバネにして、進化のために生かせないでいることが重大なのです。すべては理由があって起こります。そしてそれは、一人一人が内的に、より高められていくためです。ですから、今、目の前にある困難、問題は、あなたや私を少しでも進化させ、本当の幸福へと押すために与えられています。なぜ、それが与えられるのか、なぜ、そのような状態の中にいなければならないか、どうしたらよいのか、それを考え学び、生かさなければ、すべては苦しみと失敗のままで終わるでしょう。我々は、むだに死ぬために生まれて来たわけではありません。本当の意味で生まれ、生きるために、ここに来たのです。自殺をしても救われることはありません。問題はそのまま、エゴもそのままです。死ななければならないのは、我々一人一人の内に寄生するすべてのエゴです。己れに勝ち、人生に勝つためには、性の仕事（性エネルギー昇華）と心理の仕事（心理浄化、エゴ根絶）を日々、生きていくしかありません。

般若の神秘

エゴは、我々を奴隷にし地獄に落とししめれば、我々の意識を揺り動かす。進化へと押しもします。悪魔のようなエゴが、裏表のような働きをします。これはどういうことでしょうか。皆さんは、悪魔についてどう思いますか？それは空想でしょうか。今までは、目に見えないものは無いものだと信じていたかもしれません。でも、ノーシスを知って、見えないものの実在を感じ始めていませんか？我々のエゴが実在するように、悪魔も実在します。どの宗教も、神の栄光については語りますが、奥深い教知がなければ、悪魔の真実を伝えることはできません。皆さんは、ルシ



「サタン」の矢野 (モンスターゲドレ)

ファーという天使について知っていますか。また、だれでも知っている般若についてはどうですか。金色の般若を見たことがあると思います。ほとんどの人が、サタン(悪魔)もルシファーも般若も知りません。ルシファーとは、光(ルース)を創る(ファー)者ということです。ルシフェルという天使が、うぬぼれと忍耐の無さのために、地に落ちました。ルシファーは、落ちた天使と呼ばれます。落ちたとはいえ、天使なので1つの役目。真実を伝えるという役目を与えられました。このルシファーは日本の般若と同じものです。般若とは、梵語で智慧のことです。真理を理解し悟りを開く最高の智慧です。光を創る、それは叡智を手にするにできることではありません。般若は叡智を象徴します。金色も同様です。ミケランジェロの彫刻の1つに、2本の角をつけたモーセの像がありますが、これは般若の角と同じもので叡智を象徴しています。日本の結婚式では、角隠しをします。この角が叡智の角を象徴していて、女性が叡智を与えるということの意味します。叡智——それは創造主の受動的な部分、父に対する母からやって来ました。人類に正しい道を教えるため、天から地に伝えられ、時代、民族によって異なった形をとって来ました。そして、1人の女性、女神が人類を救いにやって来るとい話が、多く伝えられているのではないのでしょうか。叡智を象徴する聖杯は、永遠なる女性要素と女性性器を象徴します。男性は、女性を通さずに叡智を手にするにはできないということです。1組の男女が、本当の意味で結ばれる

ことによって、叡智を得るということです。般若と悪魔を表わす数は15です。15は $1+5=6$ で、6は性を表わします。このように、性の神秘を生きることによって進化への扉を開き、叡智を手にするのできるのです。我々にも、外には宇宙の偉大な父と母、内には1人1人の聖なる父と母がいます。すべて、外にあるものは内にもありますから、ルシファーも我々の外と、1人1人の内とに存在しています。我々の影のような、闇の兄弟と言え存在です。そしてすべては二元性を持っていますから、ルシファーも^{陽性}な部分と、^{陰性}な部分があります。この^{陽性}な部分が、我々に誘惑を与え進化のための援助となります。この^{陰性}な部分は、すべてを破壊するサタン、悪魔です。この^{陰性}な部分が、我々の内にあってエゴとなります。エゴは、真実の光を伝えるルシファ



一を、おおい隠している黒い衣であり、これがサタン、悪魔です。我々を戦争へ、破壊へと挑発します。すべてを破壊するのが彼の役目です。光を隠している黒い衣をはぎとれば、そこには叡智を伝えるルシファー、般若が存在しています。我々はすべての誘惑に勝ち、般若の角と光を手に入れなければなりません。

このルシファーは、すべての文明、民族の中に見られます。龍（龍と闘う大天使ミカエル）、犬（弘法大師を導びいたと言われる黒と白の犬）、雄山羊（角と強力な性エネルギーを象徴）、雄牛（肥沃さ）などがあります。また錬金術の中では、血に宿る火、硫黄として、アステカ文明の中では金星、明けの明星として表わされています。金星は愛の星、性を表わします。また、般若に関連する言葉に、般若声（徳知に満ちた仏の声）、般若の船（仏がその智慧で人々を助けること）、般若湯（僧の隠語、酒）などがあります。お酒は、前にも書きましたが、御神酒で表わされている性エネルギーのことです。性の神秘が、般若の叡智へ導びきます。

なお、注意してほしいことを少し書きたいと思います。日本では先祖霊、先祖供養ということが良く言われますが、これまでも説明したように、それはまちがいです。先祖でも、他人でも、死んでしまった人の霊は、三次元にいるのではありません。低次である洗淨の場か、高次か、あるいはすでに肉体を与えられ転生しているかもしれません。幽霊は死人のパーソナリティ（人格）で、それは死人のぬけがらです。亡くなった人への援助は、お金や物でもなく、聖なる法によるその人の、魂と霊の進化を、心から祈る方がずっと援助になるでしょう。魂と霊のために、生きている間にこそ、正しい知識を知って自他ともに与えあい、分かあうことが大事です。先祖供養、水子供養という名目の搾取にだまされないように、本当のことを知る必要があります。霊媒がしていることは、ほとんどこの死人のパーソナリティ（人格）に自分の肉体を使わせていることです。また動物霊、これは特別の場合を除き、集団霊によって導びかれます。個々の霊を持ってはいません。サタン（悪魔）が、動物の姿をして、我々に害をおよぼしているのです。物事を区別することを習って、自分の力で判断できるようになっていきましょう。

3. 心理的な仕事

自己観察

心理的な仕事、それは自分へ働きかける仕事です。最初に与えられたエゴは、転生の間に大変強かに肥え太って来ました。欲望のまま、退化へと流されて来たからです。進化のためには、まず、この流れを止めなければなりません。まず、自分にエゴがあること、退化へ流されてしまっていることに気づかなければなりません。思っていないことを始めることはできないのですから。エゴを持っている、それを認めないと心理的な仕事は開始できないのです。だれでも、自分の現実を認めるのは大変困難で、とても苦痛なことです。でももし、進化し自分を変

えていきたいのなら、自分に正直になることが必要です。本当に変わっていく、それは、表面的な言動や“振れ”を変えるのではなく、内にあるエゴを捨てていくことなのです。よごれた体に、いくら見せかけの新しい服を着せても中味は変わりません。外からなにかを入れる前に、中の悪いものを出すのが先です。エゴは、我々に絶え間ない訓練をさせてくれるものでもあります。

自分へ働きかけるとは、自分の内側に注意を向けることです。これまでは、外で起こることとそれによって起こる自分の感情、印象、それらは全く区別できない1つのものだったと思います。でも、これからはいつも自分を観察し、観察する自分とされる自分を意識しましょう。それは1人1人が行うこと、個人の中の目に見えない仕事です。ノーシスは理論などではなく、本当に個人の生き方そのものだということが、おわかりになると思います。頭で知る、肯定することと、心で理解するのとは全然別のことです。いくら水泳の本を読んで知ったとしても、実際に練習しなくては、泳げるようにはなりません。我々のエゴも心理も、24時間、休みなく活動しています。意識をもって自分に目を向け、耳を傾けましょう。そうすると、かつてにさまざまのことを思っている、話している自分を発見します。寝つくまでのぼんやりした時に、考え事もしていないのに、自分の内であれこれしゃべっている自分、その声を聞くでしょう。そして、ありもしない空想を見ている自分にも出会うでしょう。また1つの仕事のために手足を動かし、頭もその仕事のことを考えながらやっているのに、全く無関係のおしゃべりをしている自分にも気づくでしょう。過去や未来を夢のように空想したり、他人のことを自分の好きかかってに批判したり、美化したり、憎悪を強めたり……このように、1人だと思っていた自分の中に、別の自分がたくさんいる！と驚き実感すると思います。悪い考え、^{悪い}一な考えはエゴから生じます。意識して生活しない限り、ただ物事に無意識に機械的に反応する生活が続きます。見聞きする外からの印象を、無意識に、無防備に受け取ると、そのまま心理の内まで届きます。そして我々の心理をよこし、どんどん心理的毒素をためていきます。24時間、自分の五感を通して受け取るもの、また内に生ずるすべての考え、感情は自分で変えていく必要があります。受け取るすべてのものは、我々の潜在意識に記録されます。ですから、その時悪影響のあるものは、自分の冷静な判断で答えを出してから、正しいものを記録するようにします。外の物事に対して、できるだけ感情をさしはさまないようにしましょう。問題と自分を離して、1つに混乱させずに客観的に見るようにします。

たとえば、だれかによって、非常に気分を害されたとします。そうしたら、なるべく早く怒っている自分を想像してください。そして、その怒れる自分を見ているもう1人の自分を思い浮かべましょう。心の中で、2人の自分に話し合いをさせるのです。あなたは今、なにをしていますか？怒ったのは、なにがどうしたからですか？相手はどういう状態で、なにをしたのですか？それに対して、あな



激昂したときのオーラ(魂の体)

たはなせ、そのように反応しましたか？相手の行動は、相手のあるがままの内的な位置がそうさせます。良いも悪いもない、あるがままの状態がそうさせています。それに即、反応するのは、そんな反応しか持てないあなたの内的レベル(段階)のせいです。今、怒っているけれど、それによってなにが起きましたか？あなたの体の中から多くのカルシウムが、生命エネルギーがなくなりました。なんてもったいないのでしょうか。怒りのエゴがまた1つ強くなって、とても喜んでいきます。そして私の魂と霊は泣いています。私のエゴとは無関係な周囲の人にも、大変^{strong}な悪いエネルギーを発散させてしまっています。これは、怒りのエゴに引きずられてしまったからです。周囲の人にも害を与えたが、あなたが一番被害を受けました。怒るのはやめて前を向きなさい。こんなふうに、自分に問い、語るこ

とによって、その時々エゴを押しとどめ、自分の内に少しでも深く入っていきましょう。そして、本来、エゴ根絶と進化のために使う性エネルギーや心理のエネルギーを、エゴのためにむだに悪く使うのを減らしていかなければなりません。我々の持っているエネルギーの本当の使い方、それは頭でわかるのではなく、日々このように意識をもって自分とのやりとりを生きることによって、初めて理解していくものです。これは、外部には見えない、自らの能動的な行動です。1日の終わりに、朝からのことをずっと反省するのも良いでしょう。運命の所でも書いたように、1日の歴史は、あなたや私の心がどのように動いてきたか、ということ。1日の中で起きたことがらに、自分がどう感じ、どうしたか、どういう時に怒り、また喜ぶか、それはなぜか、それで自分はどのようにしていくのか、そのようにして自分を観察しましょう。

エゴを根絶する

我々のエゴのエネルギーは大変強いものです。エゴに勝てるもの、それは昇華された性エネルギーです。これが神聖な、唯一最強のエネルギーです。これしかありません。ですから、我々がいくら口でエゴをなくそうとか、精神力でなくそうなどと思っても、全く不可能なことです。失敗のたびに反省し、肝に銘じたとしても、同じことをくり返します。なくさなければ、その時々最強のエゴに操

られるだけです。エゴは、心理的な仕事と性エネルギー昇華によってのみ、絶滅できるのです。そして、エゴをなくすには、正しい方法を注意深く実行する必要があります。まず初めに、次のことを忘れないでください。そして疲れた時、くじけそうな時は思い出してください。

- エゴはだれでも持っていて、必ず根絶できるものである。(永続しない)
- エゴが我々を破壊しよう、破壊させようとしている。
- エゴは訓練を与えてくれる。
- エゴをなくすチャンスとして、この人生が与えられている。
- 起こってくるすべてのこと、この世のすべての苦悩、失敗、それらはすべて過ぎ去ってしまうものである。
- エゴ(闇)は光によって作られ、光に従うものである。
- エゴがどれほど強く見えなくても、決して魂に勝つことはない。エゴ以上の魂をすべての人が持っている。
- 進化のためにはいつも高次から援助があり、決して一人で闘うのではない。
- 逃げたりあきらめたりしたら、それですべてはおしまい。生きている間は逃げられても、死後は逃げられない。苦痛と強制を伴って洗い流されることになる。
- 自分をだますことはできない。

エゴを発見していくためには、まず自己観察をしなければなりません。そして、自分の失敗を悩んだり、いい訳したり、正当化したりせず、正直にすなおに、勇気を持つ必要があります。失敗をすることによって、自分を見せられ学びます。表面的な失敗を避けるために、なにかするのをやめても、自分のエゴは顔を出さないだけで隠れ住んでいます。できるのにやろうとしないのもまちがいです。自分にいい訳をしない、エゴのいい訳にだまされないようにもしなければなりません



人間は、無知ゆえに
何千年の間
サタンの奴隷となってきた。

ん。そして外と内、問題と自分を1つに混乱してしまわないように、問題の渦の中にまきこまれないように、自分をちゃんと見ていきましょう。いつも一瞬一瞬、自分を見ている自分を持ち続けましょう。

エゴを発見したら、次は根絶です。

① エゴの発見。

② エゴを理解する — なぜそのエゴがあるか、どういう時、そのエゴが活躍するか、その時自分はいつもどうなっているのか、ではどうしたらよいか、それらを深く細かく、エゴについて疑問を発し、答えを捜します。そのためには、瞑想することによって、頭で考える浅い答えではなく、内的な深い答えが得られます。祈りは神と語ることであり、瞑想は受動的になって、神からのメッセージを受けとることです。

③ エゴを癒す — 理解できたものには、決定的な絶対的な言葉を下すことができます。自分で自分に(エゴに)言います。「私に害を与えているエゴを、私は根絶します。魂が私のすべてを支配します」と、このように観察の目、意識、言葉をエゴに向けることによって、エゴを弱らせます。

④ 根絶する — それには昇華された性エネルギーがなければなりません。それには、肉体がなければ不可能で、肉体の中ではすべてのエネルギーの変換が成しとげられます。生きている間に、それを成さなければなりません。性エネルギーを昇華させるためには、聖なる母の助けが不可欠です。我々の性エネルギーが、仙骨に存在している聖なる母と1つにならない限りは、上昇することはないからです。だからこそ、我々が性エネルギーの昇華を行う時には、聖なる母に、心の底からエゴ根絶を願い、祈らなければなりません。聖なる母のみが、我々のエゴ根絶の力を持っています。

聖なる母、クンダリーニは霊氣的な火であり、とくろを巻いた蛇で表わされます。この蛇は世界中の文明の中に見られます。もし性エネルギーを消耗させ續断していくなら、この蛇は下へ向かいます。これがクンダバファー(5号12ページ参照)であり、肉眼で見えなくとも人類のほとんどが持っているしっぽです。このしっぽは、我々の意識を深い眠りに引き込みます。性エネルギーを消耗する、性的に續断する。そのたびに我々のしっぽは太く長くなり、ますます深い眠りに落ち込みます。このしっぽのエネルギーが催眠術に使われるものです。他人の、大変^強なエネルギーによって眠らされ、しかも他人に一方向的に従わされる催眠術は、全く有害な危険なものです。これを防ぐには、両手の親指どうしを合わせます。これによって、エネルギーのサーキット(回路)がとじられ、外から入ってくるエネルギーを受けとることはありません。とても簡単な方法ですが、大変有効です。

己れを1つにする

人間には、進化のためにすべてのものが与えられています。そうすると、たま

されることのない意識も知性も、エゴに負けない意志も純粋な愛も持っていることとなります。しかし、現実の自分に、それだけのものを見つけることはできません。それらはすべて、我々の内に潜在していて、働くことができないでいます。それらを持っていることも、自分で育てることも習ってこなかったのですから。その上、転生の間に、またない心理的毒素を自分の中にいっぱいためこんで来てしまいました。天性を発揮するどころか、さらに意識を眠りこけさせています。本来、我々は、一人一人自ずから天性の光、天性の音を発する存在なのです。でも現実には、その光も音も消されて、外から投げかけられたものによって、不調和に響くことしかできないでいます。一人一人が美しい魂の音楽を奏でるはずなのに、とても聞き苦しい、またない音を発しています。エゴの叩くままの音しか出せないでいます。魂の出す音と、霊、肉体の音がバラバラだからです。魂の輝く天性で己れが1つに結ばれるなら、すべてが美しく清らかな1つの音を奏でるでしょう。天に昇る美しい音を聞いてみたいと思いませんか？エゴのまっ黒い衣を脱ぎ捨てましょう。そして、毒素をためこみ、よごし続けてきた心理を洗い流してあげましょう。そうすれば、太陽のもとへ帰れる神聖な黄金の霊となって、天に舞いあがるでしょう。死すべき肉体でさえ、叡智の神秘を生きて永遠なるものにしていけるのです。性の神秘と心理の真実を我身に生き、己れのすべてを1つにし、肉体をも黄金の体にしたのがイエス・キリストであり、ブッダであり弘法大師です。性エネルギー昇華、エゴ根絶、人類への献身、この3つの進化のための仕事をしながら、天に至る階段を昇っていきましょう。不調和と摩擦にあえいでいる自分が、いつの日か1つになるように。

4. ノーシスを生きるために

ノーシスは、一人一人に本当の天命と光を与えるものです。それは進化を願う一人一人が、本当に生きるためのものです。天を仰ぎ、1歩1歩歩もうと決意した己れが、自分の足で階段を昇るのです。神と己れの間にあるのは、自分の聴いエゴだけ。そして、それをほざとれるのは自分だけなのです。どんなに知識やパワー・力も超能力もある指導者や霊能者でも、また偉大な宗教でも、エゴをとってくれることはありません。進化させてくれることもありません。エゴは、自分自身の意識ある努力によって、なくしていくものです。あなたや私を救うのは、宗教やパワー・力のある人物なのではありません。一人一人が、日々、一瞬一瞬、この進化の道を生きることのみが、すべてを成しとげるのです。なにかに、だれかにたよって幻想を持つのではなく、自分で考え、自分で行動しなければなりません。性の真実を生き、心理的な仕事を実行するのは、ほかでもないあなたであり、私なのです。他人の言うことによって判断するのではなく、自分自身の意識を持って判断しなければなりません。これ以上、厳しい道はないかもしれませんが、でも、これ以上のすばらしい道は、きっとないでしょう。我々は、本当にすべて

を与えられているのです。ただ、我々のエゴがそれを見えなくしています。自分の内にも外にもノーシスで習った知識の光をあてて、我々がどれほどのものを与えられているのか、自分で感じとっていくことが大事です。習っても、それを使わなければ、生きなければ、それは役には立たず、いつか枯れてしまいます。

ベートーベンの残した勅まし

7号で、ベートーベンの曲は、エゴ根絶という厳しい道への勅ましを与えていると書きました。9号のこの号で、ベートーベンの交響曲「第九」について、ふれてみたいと思います。まず、9は御存じのように完全なる人、三位一体を3度成すことを象徴します。「第九」で、すべて通じてしまうこの曲ですが、1824年、5月7日、初演される時は、「大交響曲、終楽章にはシラーの詩、〈歓喜に寄す〉による独唱ならびに合唱の入るもの」となっていました。1824. 5. 7という数からも、深い意味を読みとることができます。 $1+8+2+4=15$ 、これはエゴ、悪魔を表わし、同時に教智の般若をも表わします。そして、 $1+5=6$ で、これは性の神秘につながります。5は人間を、7は創造のオクターブの法則を表わしています。 $5+7=12$ で、この数は太陽のまわりの12の星座、イエスの12人の使徒を表わします。それは、使徒の任務、人類のために献身する人を表わす数です。年月日の数を全部たすと、 $15+12=27$ になり、 $2+7=9$ になります。9は先に書きました、般若の教智、性の神秘、人類への献身、それが完全なる人へ導きます。さて「歓喜に寄す」という詩は、シラーが26才の時、1785年に書かれました。人間性と同僚愛の賛歌であると言われていています。大変長く、大きな8節に分かれ、全部で96行にもなるほどの詩です。ここにすべてを書いて、皆さん自身にそのメッセージを読みとってほしいくらいですが、長すぎますので、曲の中で歌われている部分、1節から4節めについてふれてみたいと思います。まず初めに、ベートーベンがこの詩を知ったのは、15才の時でした。1786年のことです。 $1+7+8+6=22$ になります。22とは帰還という意味を表わします。 $2+2=4$ で、この4で表わされる生命、その生命の源への帰還を表わしています。それは創造主である父(1)のもとへ帰るということです。15才のベートーベンは「死ぬことを知



らない人間の中に尊さはない」と言ったそうです。死ぬこと、これこそがエゴの死をさしています。ベートーベンは15才の時から、ノーシスで教える心理的な仕事、エゴ根絶の闘いを実行していました。だからこそ、彼はこの厳しい闘いの道を心から理解し、ともにこの厳しい闘いをして行く兄弟に、心からの励ましを、音楽にして残したのでしょう。ベートーベンは、人類のために宇宙的なメッセージを伝え残して行きました。

「歡喜よ 美しい神々の火花よ 至福の島の娘よ」と歌が始まります。歡喜とは、我々の霊の本源、宇宙の偉大な聖なる母を意味します。聖なる母は、すべての歡喜を宿しています。神々の火花とは、1人1人に与えられている魂の火花です。そして至福の島とは神々の住む所、聖なる水にかこまれた所です。日本のお城も濠の水に囲まれ、聖地には前号で説明した上の水があります。水は性エネルギーを表わします。昇華され黄金となった水に囲まれた所、神々の住む黄金の地を表わします。そこに住む娘とは処女マリアでしょう。処女のまま受胎し、処女のままイエスを生んだマリアです。そして我々の母でもあります。次に「我々は火のように酔って 神聖な所 汝の神殿に登る」とあります。火とは性エネルギーの火のことです。性エネルギーはぶどう酒、お酒でもあり、性エネルギーを昇華させ（ぶどう酒を飲み）、それによって我々は神々の所へ上昇できます。「時流が分けた」ということは、創造と進化の過程で、我々が故郷から旅立ち、離れたということですが、でも、「汝の不思議な力」によって、つまり、蛇である聖なる母の力によって、我々は、もう一度魂の起源へ結ばれるわけですが、だから我々は兄弟なのです。「大きな成功」「1人のしとやかな女を得たもの」「たった1つの心をも この世で自分のものといえる人」それは教智を手にし、エゴに捕われていた己れの霊、心理を解放し自分のものとする、それを成しとげたということになります。「あらゆる存在物は歡喜を自然の乳房から飲む」といえば、天の川とミルクで象徴される偉大な聖なる母から、すべての生命が母のエッセンス（精、精隨、魂）をいただいていることを思わせま



「隠秘哲学」の木刻画

す。そしてすべての人は、「バラ色の足跡」で表わされる愛と性の神秘を、心の奥底で探し求めていると思います。「ブドウと死の試練を経た」ということは、ブドウで表わされる性の偉大なる作業と、死の試練であるエゴの根絶、心理的な

エゴの死を成しとげたこととなります。「接吻」とは愛のことかもしれません。ノースで教える2つの偉大なる作業と愛が、我らを神の前に連れていくのであり、そうすれば我々の内なるルシファー、「光の天使」はもう神の前に立っています。これが、「1人の友となる存在」とも思われます。そして性の誘惑である快楽は、頽廃した者をさらに落とすものになります。「歓喜は永遠の自然における強かなゼンマイ」とは、偉大な聖なる母のことです。母は渦巻に巻いたバネ、つまり、とくろを巻いた蛇であり、永遠を貫いている偉大な蛇の力（クンダリーニ・シャクティ）だということです。ですから、この偉大な母の蛇の力が全世界の時計を動かし、全宇宙に流れています。そして歓喜が、すべての霊と魂を開花させ、肉眼では見えない神々の世界で魂が生かされています。そしてベートーベンは音楽の響き、バイブレーション（波動）を伴って我々に問いかけ、訴えています。創造者（愛する父）を予感するか？ 麗くか？（全身全霊をこめて求めるか？）と、星空の上に、きつといる父を捜せと、「大きな環の中に住んでいる者」、それは、この全宇宙の生命の環の中にいる者であり、死の試練の門をくぐろうとする者のことではないでしょうか。門の中に入ろうとする者たちは進化と献身への決意、その1つの思いを誓わなければなりません。心からの深い決意が、我々を父のもと、魂の故郷へと導きます。

このようにメッセージを讀みとることができます。それは、1人1人が与えられたメッセージの中から、最も自分にふさわしい、最も必要な答えを自分で見つけ出すことです。そうすれば、今までは感じとれなかったものを見るでしょう。

ベートーベンは終楽章で、曲と詩をつなぐために次の言葉を入れました。「おお友よ、この音ではなくもっと快く、もっと喜びにあふれたものを歌い出そうではないか」。ベートーベンの求めた喜びあふれる歌、それがすべての人の内に秘められた、魂の奏でる光の音楽のことではないかと思えます。それは神々の歌う音楽と1つに響きあう、真に美しい波動（バイブレーション）なのではないでしょうか。15才で初めてこの詩を知り、38年の後まで自分の中であたたかめ続けました。そして、耳も聞こえない状態で、心の底からわきあがる万物の生命と平和への賛歌を完成させました。広大な大河のうねりのように、我々の心の奥底までしみとおろし揺さぶっています。

オペラ「パルジファル」の作曲者、ワーグナーが33才の時、この第九を指揮しています。1846年4月5日、復活祭（キリストの復活を記念する、イースター）の前の日曜日だったそうです。その日曜日は、棕櫚の日曜日と言われます。キリストがエルサレムに入場する時、人々が棕櫚の枝をまいて迎えたからです。棕櫚はヤシ科の木ですが、ヤシの木は勝利を象徴する木です。そして、この棕櫚の日曜日の演奏は慣例となって続いたそうです。ワーグナーが初めて、第九を指揮する時、曲についての解説文を書き、森鷗外が大正2年（1913年）に翻訳しています。この解説は、ゲーテの「ファウスト」を引用して書かれています。ワーグナー

は、ベートーベンの9つの交響曲の中にすべての歴史が含まれると言ったそうです。ワーグナーが読みとった深いメッセージを、我々1人1人が読みとっていくことが重要です。それは周囲のあらゆる物、起こる物事からも可能なことです。ワーグナーは、それから23年後に「ベートーベン論」を書き、こう言っています。第九の終楽章が我々を揺さぶるのは、人間の声そのものによる。聞く者をその声と和合したい気にさせてしまう。そのようなことは、バッハの宗教音楽の中にすでに見られると言っています。ベートーベンの求めた喜びあふれる音の響きその波動が、魂を揺さぶります。

ここで興味深い例をあげたいと思います。バッハの曲に「心と口と行いと命」というのがあります。これは、曲名そのものが、仏教で言う身口意（体と口と心）と同様に、人間のすべての行動を真の命のために行うようにと言っているように感じます。この曲は、教曲集まって1つの名前の曲になっています。その中の1つ、「主よ、人の望みの喜びよ」は、途中と最後の2回演奏され、最後は歌が入ります。1人の男の子がいて、この「主よ、人の望み……」が大好きで、お母さんにレコードをかけてもらっては恍惚として踊っています。独特の顔をするので、お母さんは不動明王のような、と表現します。彼はまだ3才になりません。「主よ、人の望み……」は音拍子という珍しい曲です。この男の子が2才になる前、お母さんがバッハのメヌエットを弾くと、両手で顔をおおい泣き出すということが何度もあったそうです。バッハの曲は神聖な天からのメッセージ、教会的な深い意味をこめています。この男の子を泣かせたものは、なんだったのでしょうか。バッハの響きにのって、なにを味わっているのでしょうか。

我々大人は、子どもはすべて大人より未熟だと思っています。でも、3~5才の子どもが最も意識が目覚めています。意識の目覚め、感性の深さに、年齢は関係ありません。子どもたちの秘めている芽を、知識を知った者が培う手助けができるなら、本当に素晴らしいことだと思います。そして、この進化の道においては、エゴを根絶した分ずつ、前に歩いて行けるのです。本当の先生、マスターはエゴを根絶した人物であり、見せかけの権力や地位には全く無関係です。

もう一度、「第九」にもどりますが、日本ほど演奏される国はないでしょう。12月だけでも大変な回数になります。人々も街も「第九」のために落ち着かなくなるようです。これはどうしてでしょうか。それは、目に見えない次元で、日本とベートーベンとキリストと金星、それらに関連づけるものがあるからです。1年の12の月には、それ特有のエネルギーの流れがあります。12月は、松の木からの精神的な特別のエネルギーがあり、我々のハートにもしみとおってきます。12月24日といえば、キリスト生誕を祝う日で、クリスマスツリーは松の木を使います。もみの木も松科の木です。ツリーの上には星を飾り、この星が金星を象徴しています。この時期に、金星の強い影響があることを意味します。金星の愛の光が、我々を明るく照らします。愛、それはキリストが人類に示した、我身をささ

げる献身的な純粋な愛です。真の愛は、性の神秘とエゴ根絶によって、我身の内に生まれます。一人一人の中に内なるキリストを、性の神秘によって誕生する黄金の子を、誕生させなければなりません。黄金の子の誕生日、それが自分にとっての12月24日です。もし、キリストの愛を自分の中に培いたければ、自分のエゴと闘うことです。黒いエゴが占領している所へ光の入る余地はないのです。

日本は、宇宙のアロプログラムの中で特別の使命を持っています。その使命のために、独特の歴史を重ねてきました。すべての叡智が明かされた今、日本が人類のために使命を果たす時が来ています。それについては、人類学の時にふれたいと思います。大変多くの方が、日本は特別の国であり、なにかあると感じています。外国ではよく、日本には神秘があると言います。その神秘を、直観的に感じている人たちも多くなります。日本は、日出づる国と言われます。そして、金星の子であるとも言われます。ですから12月には、金星からの影響は特別なものになります。人々は、無意識にも愛の光の影響を受けます。

12と24という数字を考えてみます。12は $1+2=3$ になります。3は三位一体。我身の内に成す創造の三位一体であり、性と脳とハートの統一です。24は $2+4=6$ で性を表わします。そして、 $3+6=9$ になります。完全なる人を意味する9です。三位一体を3度試したげた完全なイニシエート（奥義に通じた人）です。ベートーベンも1人のイニシエートです。愛と性、心理の真実を理解していたからこそ、

深いメッセージをこめた普遍的な交響曲「第九」を残していきました。このように、物事は深くかかわりあって起こってきます。金星の子である日本で、キリスト生誕を祝う12月に、万物の生命の幸福を願う「第九」が各地で高らかに歌われる。これは、本当に奥深い所からの力が我々を揺り動かしているからです。単なるお祭り騒ぎのように思えることが、こんなにも深遠な意味を持っていることを、だれが想像できたでしょう。

内なる闘いをしていく者に、すべてが与えられています。



歎喜に寄す(抄) ミラー

歎喜よ 美しい神々の火花よ
至福の島の娘よ

われわれは火のように酔って

神聖なところ 汝の神殿に登る

汝の不思議な力は時流がまぎびしく分けたものを

もう一度結びつける

汝のやさしい翼の覆っているところでは

すべての人間が兄弟になる

—— リフレイン ——

抱き合おう 数百万の人々よ

この接吻を全世界に

兄弟よ 星空の上には

一人の愛する父がいるに違いない

大きな成功をとげて

一人の友の友となり得た人は

一人のしとやかな女を得たものは

自分の歎喜の声を加えよ

そうだった一つの心をも

この世で自分のものといえる人はだ

そしてそれが全く出来ないものは

泣きながらこの仲間からははずれて

いるが——

—— リフレイン ——

大きな環の中に住んでいるものは
共感を嘗うことだ

共感の星のところへ

未知の人の支配しているところへ導く

あらゆる存在物は歎喜を

自然の乳房から飲む

あらゆる善人もあらゆる悪人も

自然のバラ色の足跡を追う

自然はわれわれに接吻とブドウと

死の試練を経た一人の友を与えた

快楽は虫けらのような歎喜に与えられ

光の天使は神の前に立っている

—— リフレイン ——

汝らは眺めか 数百万の人々よ

世界よ 汝は創造者を予感するか

星空の上にいるかれを捜せ

星空の上にかれはいるに違いない

歎喜は永遠の自然における

強力なゼンマイである

歎喜は大きな世界の時計の

歯車を動かしているのだ

歎喜は花をつばみから呼び出し

もろもろの太陽を蒼空から呼び出して

天文学者の望遠鏡の知らない空間で

歎喜はもろもろの太陽を回転させる

—— リフレイン ——

—— リフレイン ——